

自分史のいよいよの充実を祈る

広島大学長 田中 隆 荘



このたび本学から六十七名の方が退職されます。退職される方をお送りするにあたり、一言、送別の言葉を申し上げます。

長年務めた職を退くときが近づきますと、とりとめもなく自分の過去や未来のこと、つまり自分史を振り返ったり、これからの道を考えたりしたこと、思い出します。自分を見つめるもう一人の自分を持つこの機会に、私達に共通する本学の歴史を、皆さんと共に振り返ってみたいと思います。

皆さんの中で、本学在職期間が最も長い方は、本学の創設当初から、すなわち一九四九年前後からになります。当時の本学は、新旧混成の騒雑の中にも自由自主と解放感が満ちていました。ここで、その直前の本学創設の状況を※研究書で見えますと、大戦後（一九四五年）間もなく、全国的に国立大学創設の気運が高まり、広島地域では一九四七年、広島県知事を委員長とする「広島総合大学設立促進委員会」が結成されており、その一方で文部

省は、一九四八年、新制国立大学実施要綱を定め、国立大学は原則として一県一大学方針を打ち出してあります。その翌春（一九四九年）広島では、

地域にあった旧制度の高等教育機関のうちから、国立の広島文理科大学、広島高等師範学校、広島工業専門学校、広島高等師範学校、広島女子高等師範学校、広島師範学校、広島青年師範学校、広島市立の工業専門学校を組織的に統合して、新大学制度による文学部、教育学部、理学部、工学部、教養部を編成し、新たに政経学部と水畜産学部を加えて六学部一教養部の総合大学として、広島大学を設置したのであります。

一九五三年、本学は広島県立医科大学を統合して医学部、一九六五年歯学部、一九七四年教養部を廃止して総合科学部を各設置し、一九七七年政経学部を分離して法学部及び経済学部に、一九七八年教育学部の東雲分校を改組して学校教育学部、一九七九年水畜産学部を改組して生物生産学部、各拡充整備して、現在の十一学部体制を完

成しました。その間、及びその後を含めて、大学院を全学部部に設置し、附属図書館、附属研究所、附属病院及び研究施設等を次々と整備してきました。

その途中の一九六八年、全国的に起きた大学紛争は、本学でも約一年間にわたりました。一九七二年十一月、八箇所に分散していたキャンパスを統合移転することを決定し、翌年二月に移転地を当時の賀茂郡西条地区（現在の東広島市鏡山）に決定しました。一九八二年三月、工学部が最初に移転し、以後、一九八八年生物生産学部、一九八九年教育学部、一九九一年理学部、一九九二年中央図書館が各移転し、今春には総合科学部が移転します。今後、

一九九四年に文学部、一九九五年には学校教育学部、法学部、経済学部が移転します。その後も、各種の施設整備が残りますが、大型施設の移転は後二年で完了することになります。移転決定から二十三年間、最初の工学部移転から十三年間という壮大な事業であります。

以上、創設以来四十四年間の本学の歴史に照らして、私達それぞれに自分史を回顧するとき、追懐すべきなものがあります。この四十四年を仮に十年区切りで性格づけしますと、最初の一九五〇年代は新旧両学位（博士）制度も併存しているなど、大学新制度への調整期であります。一九六〇年代は調整から整備への転換期、一九七〇年代は整備期、一九八〇年代は整備から充実への移行期であります。現在を含む一九九〇年代は、キャンパス統合完了を誘因とする充実期であると見ます。本学は、一九九二年に教育研究の整備改善大綱を定め、大学院整備充実基本方針を決定し、学問の府として、自由自主に、専門学問の深化と総合化の能力を併せ持つ大学として、個性的に世界と地域に高く飛翔することが期待されます。

人間は日々を心豊かに行動することが必要であります。退職されても日々を実感し、自分史が愈々充実しますことを祈ります。

本学の充実期を迎えて、皆さんを本学からお送りせねばならないことは、誠に残念であります。皆さんにこれからも本学を見守っていただくことを希望し、職務を全うされたご努力に感謝と敬意を表し、ご健康を念じて、送別の言葉といたします。